

『イジワルなキューピッド』

著：森本あき

ill：角田 緑

「俺を雇ってください！」

ためらわずに、言葉が出ていた。国島は眉をひそめて、それから、肩をすくめる。「就職希望なら、来年、一人だけ採るから、そのとき応募しろ。なんだ、客じゃねえのか。愛想よくするんじゃないよ」

「え、あれですか!？」

ぽろりとこぼれた感想に、国島が顔をしかめた。

「おまえなあ、俺が愛想悪いときは本気でひどいんだ。それも知らずに、うちに就職したいとか軽々しく言うんじゃないよ」

「でも！ 入社してみないと、国島さんがどういう人か分からないじゃないですか！」

「へえ、俺の名前知ってた？」

ちょっとは興味を持ったように、国島が聞いてくる。光樹は、こくこく、とうなずいた。

「あの、俺、昨日、この記事を読んで」

雑誌の切り抜きを見せると、国島が、どうでもいい、というふうに手を振る。

「それ、校正したの俺じゃねえし。うちにはうちのイメージがあるんです、とかって、だれかが丁寧な口調に直してくれたから、それを期待してんなら、おあいにくさま、俺はこんな感じだ」

そう言って歩き出そうとする国島の前に、立ちふさがるように光樹は足を進めた。せっかく会えたんだから、なんとかしなきゃ！ そんなふう焦(あせ)って、言葉が勝手に口からこぼれる。

「俺、昨日まで、すっごい落ち込んでて。就職はできないし、将来に希望も見出せないし、かといって、ずっとバイトでだらだらやっていく、なんて、もっと不安だし、そういうの性にあわないし、って、ずっとぐるぐる悩んでたんです」

「あのな」

国島があきれた表情になった。

「相談料ももらってないのに、なんで、俺がおまえの話を聞いてやらなきゃならないんだ。グチを聞いてほしけりゃ、正式に相談に来い。それだけか？ なら、俺は…」

立ち去りかけた国島の腕を、光樹はぎゅっとつかむ。

「なんだよ」

迷惑そうに眉(み)間(けん)に皺(しわ)を寄せて、国島が振り返る。

「なんでもします！ 掃除だけ、とか、書類をシュレッダーにかけるだけ、とか、雑用でいいですから！ 使えないと思ったら、すぐにクビにしてください。あ、いや、やっぱり、クビはいやです。しばらく試用期間ということで、大目に見てください。その代わり、その間は一切、お給料とかいりませんから！」

「…なんで、おまえを雇うこと前提で話してるんだ？」

「雇うかどうか決める前に、お試し期間をください。本当に、なんでもしますんで！」

はあ、と国島が盛大にため息をついた。ごめんなさい！ と謝って立ち去りたくなる

気持ちを、ぐっところえる。

「あのな、うちに入ったところで、出会いはないぞ。記事読んだら知ってるだろうが、うちに女の会員はいない。皆無ってわけじゃないが、だいたい、途中でやめちまう。だから、そういうのが目当てなら…」

「自分に自信を持ちたいんです！」

光樹は叫んでいた。

ただ、様子を見たい、と欲していただけだったのに。

こんなところで働けたらいいけど無理だろうな、と分かっているのに。

それでも、これを逃したら、もう二度とめぐってこないだろうチャンスを逃したくなかった。

ここで国島に出会ったのは偶然だけど、でも、ただの偶然で終わらせたくなかった。

昨日、自分を前向きにならせてくれた相手が、目の前にいる。

どうせ、断られれば、二度と会うことはない。だったら、思い切りぶつかってみよう。

「あの記事を読んで、おおげさでもなんでもなく、俺、救われたんです。国島さんが本当はどういう人なのか、事務所がどんな雰囲気なのか、まったく分からないですけど、それでも、働きたいんです。俺を雇ってください！」

逃がさないように国島の腕をつかんだまま、光樹は深々と頭を下げた。

そんなことしてもムダだ、でも、分かった、でも、なんでもいいから、国島が声をかけてくれるまで顔を上げないつもりで。

しばらくして、さっきよりもっと大きなため息が聞こえた。だけど、そんなことでめげてられない。

「俺は、おかしなやつを引き寄せるセンサーでも持ってんのか？」

その言い方で、ちゃんと分かった。光樹はぱっと顔を上げて、にっこりと笑う。

「俺、がんばります！」

「がんばるのは当たり前として、だ」

国島は渋い表情になった。

「初対面の相手に押し切られて、あげく見習いとして雇うことになった、なんぞが知られようものなら、うちの連中にバカにされるだけだからな。あ、そうだ。押し切られた事実を隠せばいい」

国島は、ぱちん、と指を鳴らした。

「ちょうど一人辞めたところだし、内々に話を進めてた、ってことにすれば、怪しまれはするだろうけど、つつこめまい。ということで、名前も知らないおまえ」

「碓氷光樹です」

光樹はすばやく答える。国島は、ふん、とうなずいた。

「じゃあ、碓氷。来週の月曜、八時半に事務所に来い。地図はパソコンで検索したほうが正確なのが出るぞ。遅れたら、この話はなしな」

「はいっ！」

光樹は、こくこく、とうなずく。国島がけげんな表情になった。

「体(てい)よく追い払われてるだけかもしれないのに、なんで、そんなに嬉しそうなんだ？」

「国島さんがそんな人だったら、その事実はとても残念ですけど、押しかけてまで働きたいとは思いません。国島さんが俺が思ってるとおりの人なら、来週から一緒に働け

るんです。どっちにしても、いいことばかりです」

「ふーん」

国島が光樹を眺める。

「碓氷光樹、な。覚えとこう」

「ありがとうございます！」

「ありがたいかどうかは、実際に来てみないと分からないぞ。案内はしないから、勝手に下見をするなり、このまま帰るなりしろ。あと、来週までうちの事務所に顔を出すな」

「はい、分かりました」

試用期間になれば堂々と中に入れるのだから、わざわざ、今日行く必要はない。

「それと、手を離せ」

「あ、すみません」

ずっとつかんでいたことを忘れていた。光樹は慌てて、国島の手を離す。

「それじゃあ、来週な。遅れてもいいぞ。そうしたら、雇わなくてすむ」

「遅れません！」

国島を見送って、そのあと、近くの交番で事務所への行き方を教えてもらい、駅からの道順をすっかり覚えて、家に帰った。その日は興奮していたのかなかなか眠れず、かといってまったく悪い気分ではなく、自然に笑みがこぼれてしまう。はたから見れば、かなり気味が悪かっただろう。

月曜は六時に起きて、事務所に着いたのは七時半。だれもいないと思っていたら、明かりが見えたので、おはようございます、と声をかけながら、恐る恐る中に入る。するとそこには、いかにも寝起きという姿の国島。国島は驚いたように光樹を見て。

「…根性だけはありそうだな」

ぼそり、とそうつぶやいた。

本文 p48～54 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>